

序説

昭和大学医学部 放射線医学講座 後閑武彦

病期診断における画像診断の役割は大きく、近年、その重要性はますます増加している。『臨床画像』では画像に基づく病期診断の特集として1997年11月増刊号(杉村和朗編)、2004年11月増刊号(河野 敦編)、2010年4月増刊号(河野 敦編)が刊行されている。いずれも当時としては最新の分類・画像診断が取り上げられているが、前回の特集からすでに7年が経過しているため、新たな特集を企画した。

悪性腫瘍の診断・治療は日進月歩であり、治療方針の決定に重要な役割を果たす病期分類において、アップデートな内容を取り上げていくことは必至であると考ええる。前回2010年4月増刊号の発行の前年にUICC(Unio Internationalis Contra Cancrum, 2010年より英名はUnion for International Cancer Control)の『TNM分類 改訂版』(第7版)が刊行されたが、今回折しも、UICCの『TNM分類』(第8版)が最新版として2016年12月1日に刊行、2017年1月1日より施行となっている。本書には最新版のTNM分類の内容も可能な限り含めることができた。

本特集では誌面の都合上、すべての領域の悪性腫瘍を網羅することはできなかったが、画像診断で遭遇することが多い領域はほとんど組み入れることができたように思う。執筆は臨床の第一線でご活躍の先生方をお願いした。ご多忙のなか、素晴らしい内容に仕上げてくださったことに心から感謝したい。

悪性腫瘍の診療に携わっている臨床医は、病期診断に精通していると思われるが、日々発展している画像診断の進歩に追いついていくことは容易ではないと想像する。一方、画像診断医もすべての領域の病期診断を十分理解しておくことは難しいと考える。

本書は主な悪性腫瘍の病期診断が1冊にまとめられているので、双方にとって利便性が高く日常診療に役立つと信じている。悪性腫瘍の診療に携わっておられるすべての医師・コメディカルに役立てていただけたら幸甚である。